

—師楽における生活環境の変化と年中行事の変容について—

ノートルダム清心女大家政 ○今日節子 岡井球美子

目的 本研究は生活様式の変容実態を、年中行事を一指標としてとらえたものである。岡山県南地帯においても年中行事は減少傾向にあるが、生活環境のらがいによりその変容が様々であることは、すでに報告したとおりである。そこで今回は、一農村地帯をとりあげ、具体的な生活環境の変化に伴う年中行事の変容実態を観察した。

調査方法 岡山県南の一角に位置する邑又郡牛窓町師楽を調査地域とし、昭和54年6月各家庭を訪問、老人・主婦を対象に、年中行事の種類・いわれ・内容等を聴取調査し、生活環境の観察・資料調査も行った。

調査結果 師楽は気候も穏やかで、半農半漁の自給自足の生活が営まれていた。しかし、昭和36年広大な塩田の完放により陸路が整備され、商品作物中心の畑作農業へ、さらに、兼業農家へと変化し、一帯に生活行動範囲は拡大した。また、師楽は同族集落でもある。

かつては閉鎖的環境の中で、年中行事は人々の生活の節目で、大きな楽しみであり頻繁に行われていた。しかし、塩田の完放に伴う生業の変化により、農業・漁業にかかわる行事は廃れる傾向にある。また、兼業農家の増加により行事内容の簡略化・日時の変更などの変容もみられた。一方、漁業に関係した「十日えびす」のように復活したもの、「先祖祭り・法界祭り」のように本来の意義に基づいて伝承されているものもある。このように様々な変容を繰返しながらも年中行事は現在もなお生活の中どこ何らかの意義をもち、その変容には、自然・地理的環境・同族集落・橋屋組の存在という生活環境が大きく影響を及ぼしているようであった。